

「子宮頸がん」を知ろう

昨今の新型コロナウイルス感染症の影響によって、健康診断や検診の「受診控え」が増加したと言われています。

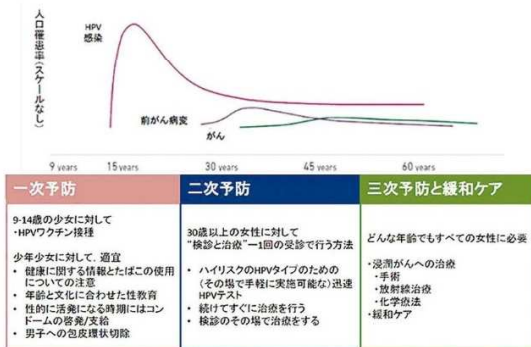
日本対がん協会は、2020年のがん検診の受診率が前年比の約3割減少し、がんを早期に発見できずに治療が遅れる人が増える可能性を指摘しています。2人に1人ががんになる時代ですが、健康で若い人にとってのはがんと自分事として考えることは難しいかもしれません。しかし、がんは年齢に関係なく若い世代も罹患します。特に、日本における「子宮頸がん」は20〜30代の若年女性に急増しており、諸外国と比べても罹患率、死亡率ともに増加傾向にある現状は深刻な問題です。

子宮頸がんの特徴 子宮頸がんとは子宮の入り口部分に



<48>

埼玉県立大学准教授 大場 良子



出典：世界的な公衆衛生上の問題「子宮頸がんの排除」に向けた WHO スライド（日本語翻訳版）

できるがんです。主な原因は、HPV（ヒト・パピローマウイルス）によるウイルス感染症で、性交渉をきっかけに感染します。一生のうち一度は誰でもかかる可能性がありますが、多くの場合は免疫の働きで自然に排除されます。しかし、HPVが排除されず感染が持続すると、一部にがんが発生することがあります。さらに、喫煙習慣が子宮頸がんの発生を高めることも分か

気になる症状は異変のサイン

ってきました。子宮頸がんの症状は、不正性器出血、おりものの異常（血液混入や悪臭など）、性交渉後の出血がみられますが、初期の段階ではほとんど自覚症状はありません。子宮頸がんから私たちの命と将来を守るためにできること 19年にWHO（世界保健機関）は、子宮頸がん排除のための生涯に對する対策を提唱しています（図参照）。しかし、日本における一次予防のHPVワクチン接種率はわずか1%未満、二次予防の検診率は約40%の低さです。日本の現状を皆さんはどのようなように考えますか。子宮頸がんは、唯一予防ができるがんです。私たち自身が子宮頸がんを知り、HPVワクチンの科学的根拠に基づいた正しい知識を理解することが必要であると考えます。そして、「症状がないから大丈夫」と過信せずに、定期的な検診を受けることで早期発見につながるのです。子宮頸がんから自らの命と将来を守るために、自分ができることから始めてみませんか。